

THE Gaskell Society of Japan

No. 21 (May 2009)

Newsletter

日本ギaskell協会 ニューズレター

Elizabeth Gaskell's Literary 'After Life'

Joanne Shattock, Professor,
University of Leicester

I am honoured to be invited to contribute to the newsletter of the Gaskell Society of Japan in this particular year, when two important anniversaries are anticipated. Not only is your Society celebrating its twentieth anniversary, but Gaskell scholars world wide are preparing to mark the bi-centenary of her birth in 2010.

As Gaskell readers and scholars we have much to celebrate. Elizabeth Gaskell's reputation has never been higher. In the U. K. the recent BBC production of *Cranford*, which incorporated story lines from 'Mr Harrison's Confessions' and *My Lady Ludlow* has introduced new readers to her work, and encouraged others to return to novels and stories they had once read and loved. New paperback editions of *Cranford*, with cover illustrations from the production have been on sale at railway bookstalls as well as in bookshops, part of a now familiar process which follows on the heels of much heralded television adaptations of nineteenth-century novels. The pleasure for Gaskellians is that it is Elizabeth Gaskell, rather than Dickens, George Eliot or Trollope who is the centre of attention.

These indications of Gaskell's widening popularity prompt reflection on the ups and downs of her reputation since her death in 1865. There have been various milestones in her literary 'after life', beginning with the obituaries, followed by the reviews of her *Novels and Tales* in the 1870s – reviews which were often posthumous assessments of her works. The next important event was the publication of the eight volume Knutsford edition 1906, a tribute by Smith Elder, her last publisher, to one of the firm's most valued authors in the previous century. There were a flurry of reviews of the Knutsford edition in 1906, an important centenary article by Lewis Melville in the *Nineteenth Century and After* in 1910, and then the World's Classics edition, by C. K. Shorter, begun in 1906 but not completed until 1919. Neither the Knutsford nor the World's Classics editions were complete.

The next important milestone, and indeed a crucial one, came with the publication of her collected letters in 1966, edited by John Chapple and Arthur Pollard. This, as we now realize, transformed subsequent biographies and critical studies. The volume of *Further Letters* (2000), edited by John Chapple and Alan Shelston, marked a further advance in the availability of primary materials essential to Gaskell scholarship.

For me and my colleagues involved in the Pickering Masters edition of *The Works of Elizabeth Gaskell*, its completion in 2005-6 was particularly satisfying. Its publication one hundred years after the Knutsford edition, was, I would argue, another milestone in the establishment of Gaskell's reputation. Thanks to the excellent work of my fellow editors there is now a complete critical edition of her works, with explanatory notes, lists of textual variants, headnotes and scholarly introductions. For the editorial team it was significant that four out of a total of ten volumes were comprised of her stories, novellas, articles, essays, reviews, prefaces, poems and a diary. The balance of the edition presents a woman of letters in the Victorian mould, working simultaneously in a variety of genres, rather than the author of five full length novels and a well known biography, as she had previously been perceived.

As General Editor of the Pickering & Chatto edition I am delighted that volumes are being translated into Japanese, beginning with the first two volumes, which contain Gaskell's uncollected journalism, her diary, the early stories, essays and book reviews. It makes available to a yet wider, discerning and appreciative audience the varied work of this remarkable nineteenth-century woman writer. This too is a cause for celebration.

第 20 回例会レポート

第 20 回例会プログラム

日時：2008 年 5 月 31 日（土曜日）午後 2 時 30 分より

会場：実践女子学園渋谷キャンパス 3 号館 5 階大会議室

総合司会 松村 豊子（江戸川大学教授）



シンポジウム 「ギaskell文学とスピンスターたち」

コーディネーター・パネリスト：田中 孝信（大阪市立大学教授）「スピンスターと女性たちの連帯」

パネリスト：大嶋 浩（兵庫教育大学教授）「スピンスターの変遷と 18・19 世紀におけるその表象」

パネリスト：閑田 朋子（日本大学准教授）「スピンスターいかに生きるべきか——

作品に隠されたブロンテとのやりとり」

第 20 回例会は天候が悪く、終日暴風雨に見舞われたにもかかわらず、シンポジウムの演題「ギaskell文学とスピンスターたち」に興味をそそられたのか、あるいは、本協会の発展を願って今回多額（百万円）のご寄付をされた鈴江璋子会長の信念と情熱にこころ動かされたのか、広い会場がほぼ満席となるほど多くの参加者があった。そして、シンポジウムは期待どおり盛況で、パネリストたちは一般に否定的にとらえられがちなスピンスター（独身女性）を社会的に有意義な存在として解釈するギaskellの独創性に着目し、各自の論を精力的に興味深く展開し、パネリストとフロアとの質疑応答もきわめて啓蒙的だった。ギaskellがスピンスターを結婚できなかった「余分な女性」あるいは「不毛な女性」ととらえず、社会の諸々の悪弊改善に寄与できる女性の自律・自立として描いた点に着目した今回のシンポジウムは、「女性らしさ」を前面にだすことが多く、「鳩」に喩えられるギaskell文学に新解釈が可能なることを示唆する興味深いものであった。

シンポジウム：「ギaskell文学とスピンスターたち」

まず、コーディネーターである田中孝信氏からギaskellが執筆活動に励んだ 19 世紀半ばにスピンスターに世間の注目が集まった社会事情とギaskellがスピンスターに積極的な意味付けを行った点に関する一般的な説明があった。次に、3 人のパネリストがスピンスターの社会的意味の歴史の変遷（担当：大嶋浩氏）、ギaskellと同時代の他の作家たちの比較——C. ブロンテとの比較（担当：閑田朋子氏）、W. コリンズ・ディケンズとの比較（担当：田中孝信氏）——について順次研究発表された。

・「スピンスターの変遷と 18・19 世紀におけるその表象」

大嶋氏は西洋の女性史におけるスピンスターの語義の変遷に着目し、興味深い図版を使用しながらわかりやすく説明された。スピンスターは古代・中世・ルネサンスでは女性の家庭内の仕事、あるいは、職業としての糸紡ぎを意味したが、17・18 世紀になると糸紡ぎという行為でなく未婚女性、老嬢を意味するようになる。氏はギaskellが活躍した 19 世紀中葉に老嬢の表象に風刺、同情、尊敬の 3 つのモードがあったことをギaskellだけでなく同時代のブロンテ姉妹や G. エリオットの作品に言及しながら検証された。ヨーロッパの文学歴史に対する造詣の深さに裏付けられた発表だった。

・「スピンスターいかに生きるべきか——作品に隠されたブロンテとのやりとり」

閑田氏は最初に次のような斬新な仮説を紹介された。「ギaskellと C. ブロンテは共にスピンスターがいかに生きるべきかという問題に深い関心を寄せ、直接的間接的の面識がない時期から、互いの作品に登場する人物の名前を暗号として用い、作品を通して、意見の交換をしていた。」この仮説を検証する氏の作品の読みは的確かつ洞察力に富んでいた。氏は特に *Shirley* と “*Libbie Marsh's Three Eras*” に注目し、2 人の作家が作品を通してスピンスターについての意見を密かに交わっていたことを興味深く実証された。

・「スピンスターと女性たちの連帯」

独身女性の連帯感と聞くと、『クラフフォード』を連想しない人はいないだろう。ところが、田中氏は敢えてこの作品をはずし、他の短編・中篇小説、特に “*Morton Hall*” における抑圧された感情の解放と女性たちの連帯感に注目し、ギaskellの世界では女性たちの連帯が時として家父長中心の家族関係を打破し、家族の幸福を増強することを

W. コリンズやディケンズといった同時代の男性作家の作品と比較しながら論証された。男性作家たちがスピンスターの爆発的なエネルギーを危険視し、家父長制度内で処理するのに対し、ギヤスケルが彼女たちを社会の進歩発展に欠かせない存在と解釈しているという結論は、氏の長年にわたるイギリス文学文化研究から導き出されたと思われる。作品の読みが洞察力に富み、なおかつ、独創的だったのが印象深い発表だった。

(松村 豊子)

第 20 回大会レポート

第 20 回大会プログラム

日時：2008 年 9 月 28 日（日曜日） 午前 10 時より

会場：神戸大学国際文化学部（E 棟 4F 会議室）

総合司会：矢次 綾（宇部工業高等専門学校准教授）

研究発表

1 司会 田村真奈美（豊橋技術科学大学准教授）

発表者 西垣 佐里（同志社大学嘱託講師）『『ルース』にみる看護と感化力：『荒涼館』との比較を通じて』

2 司会 廣野由美子（京都大学大学院教授）

発表者 梅 正行（中京大学教授）「ギヤスケルにふれて—カノンへのもどりかた、
カノンの先の先への進みかた」

総会 司会 事務局長 諸坂 成利（日本大学教授）

シンポジウム「伝記文学とギヤスケル」

コーディネーター・パネリスト：宮丸 裕二（中央大学准教授）「人生を編集する—再び物語化する歴史」

パネリスト：市川千恵子（釧路公立大学准教授）『『書く女』の政治的表象』

パネリスト：光沢 隆（名古屋大学非常勤講師）「ギヤスケルと同時代の労働者階級の伝記（自伝）」

講演 司会 松岡 光治（名古屋大学教授）

講師 大野 龍浩（熊本大学教授）「写真で綴るギヤスケルの生涯」

研究発表

1 『『ルース』にみる看護と感化力：『荒涼館』との比較を通じて』

西垣氏は 1840 年代以降の看護士の社会的地位や現状を踏まえながら、『ルース』と『荒涼館』における看護の意義をプロフェッショナルリズムと女性の感化力という側面から比較検討した。氏は二作の共通点として、各々のヒロインがレディ・ナースとして活躍すること、伝染病に感染すること、不義密通に由来する罪を背負って生きていることという共通点を挙げた上で、両作品の相違へと論を発展させた。

2 「ギヤスケルにふれて—カノンへのもどりかた、カノンの先の先への進みかた」

梅氏はイギリス 19 世紀小説のカノンを読んできた自分の 80 年代までの経験、ナイポール兄弟などカリブ海域の作家の英語小説およびヴィクトリア・セートなどのインドの作家の英雄小説、ベン・オクリなどのアフリカの作家の英語小説に目を向けた 90 年代までの経験を基に、カノンとしてのギヤスケル作品について考察した。その理由として、ギヤスケルのふれなさと、ギヤスケルが看過できなかった諸問題の中に、今後小説を読み続けるためのヒントがあるように思われることを挙げている。

シンポジウム：「伝記文学とギヤスケル」

2008 年の日本英文学会のシンポジウムでテーマとして取り上げられるなど、ライフ・ライティング（フィクショ

ンか実話かは関係なく形式も様々だが、群像ではなく個人の記憶や経験を記録した文学のジャンル。自伝、回想録、日記など）が注目されている。このような最近の批評傾向を考慮に入れ、一人の人物の歴史的記録であり虚構でもある『シャーロット・ブロンテの生涯』の中にギヤスケルが編み込んだレトリックとイデオロギーを明らかにすること、その際に「この作品をイギリス伝記文学の伝統の中に置き、前時代と同時代の伝記作品および虚構作品と比較し、複数の側面から光を当てること」が、コーディネーターの宮丸氏の挙げるシンポジウムの目的である。

1 「人生を編集する」

宮丸氏はボズウェルの『ジョンソン博士の生涯』をはじめとした前時代の作品を比較対象として挙げ、『シャーロット・ブロンテの生涯』の歴史書としての意義、ノンフィクション小説としての意義を考察した。そして、歴史研究が深まり、歴史が物語というレトリックに入り込んだ時代の中で、後者は事実を網羅的に書くべき伝記とは異なり、書き手の個人的な見聞を事実と事実の間に挟む歴史小説に近いという見解を示した。

2 「『書く女』の政治的表象」

市川氏はギヤスケルが『シャーロット・ブロンテの生涯』において、当時の理想的な女性像を利用し、「女らしさ」を体現するブロンテ像を創造したと指摘した。その上で、『ヴィレット』と比較しながら、ギヤスケルがブロンテの伝記執筆を通して家父長的権威に寄り添いつつも抵抗し、公的領域に参入する渴望を満たすものとして女性がペンを取ることを正当化していったことを検証した。

3 「ギヤスケルと同時代の労働者階級の伝記（自伝）」

光沢氏によると、19世紀のある程度の教養がある労働者は人物を書くというよりも、見聞した出来事や自分の生きた環境を書き留めたいという思いから、当時の生活、祭日の風習、暴動やストライキの記録を残した。氏はそのような労働者の伝記（自伝）と『シャーロット・ブロンテの生涯』を比較し、前者から浮かび上がる労働者像と、ギヤスケルが小説の中に描いた労働者像とを比較した。

講演：「写真で綴るギヤスケルの生涯」

大野氏は過去数年間に渡って撮りためた写真を基に作成した680枚のスライドを紹介し、伝記的事実を織り交ぜ、手紙、伝記、小説などから適宜引用しながら、ギヤスケル文学の背景を辿った。その目的として氏は、ギヤスケルが見た風景を聴衆に疑似体験させることを挙げている。氏が紹介した風景には、ロンドンの生家、故郷ナッツフォード、ストラットフォード・アポン・エイヴオンの寄宿学校の跡地、両親が若い頃を過ごし、兄が生まれたエディンバラ、新婚旅行の地（北ウェールズ）、ディケンズやシャーロット・ブロンテが訪れたプリマス・グロウヴの家、シャーロットと初めて対面した場所、ウィンダムミア湖を臨むブライアリ・クロス、『ルース』を執筆したリンデス・タワー、シャーロットを訪ねて赴いたハワース、『シルヴィアの恋人たち』の舞台ウィットビー、終焉の地ホーリーボーン（ハンプシャ）などがある。大野氏のギヤスケルへの愛情が伝わってくる熱意あふれる講演であった。

（矢次 綾）



2008年9月1日から、1年間の在外研究でロンドンに在住する機会を得た。ロンドンが多民族、多言語、多文化社会であるということは頭ではわかっているつもりだったが、実際に住んでみると改めてその多様ぶりを実感させられる。たとえば地下鉄に乗っていて聞こえてくる言語はフランス語、ギリシャ語、中国語など実に様々だ。コックニーはいったいどこに行ったら聞けるのだろうかと思ってしまうぐらいだ。イギリス人は食に対しては保守的だと言われていたが、今回来てみると、それも大きく変わりつつあることがわかった。フィッシュ・アンド・チップスの店はあまり見かけなくなり、かわってイタリアンのカフェやチャイニーズのテイクアウトの店が並ぶ。日本食もロンドンの日常の食事としてすっかり定着したようだ。スーパーにはお寿司のランチパックが並び、Wagamama という日本食のフランチャイズ店はどこへ行っても大人気である。

このように異なる民族、言語、文化が混交している社会だからこそ、確固としたアイデンティティを持ちたいという欲求が生まれるのかもしれない。イギリスではそのアイデンティティの拠り所を過去に求め、自らのルーツを探る動きがとて盛んであるように思われる。具体的な例を挙げよう。ここイギリスでは家系図を探求するのが一種の流行のようになってきている。もちろん家系に対する執着は今に始まったことではない。ヴィクトリア朝の小説でも、家系に言及する登場人物は枚挙に暇がない。ただ、当時と異なるのは、家系に対する執着が社会の上層部だけではなく、社会全体に広がっているということであろう。たとえば Society of Genealogists という組織のホームページを見れば、毎週のように家系図を探る手引きのようなワークショップや講演会が開かれているのがわかる。家族の姓や場所を入力すれば、様々な情報を提供してくれるというデータベースさえある。

ここで思い出すのが、『クランフォード』でミス・マティーが母や父の古い手紙を燃やす場面だ。「私が逝ってしまったあと、こんなものに気をかける人なんていないからね」——そうやってマティーはインクの色あせた手紙をひとつひとつ暖炉の火にくべる。なんとも切なく心を打つ場面である。マティーの過去は、家系図のように図式的に記録される過去とは対照的に、あくまでも個人のものであり、それゆえに脆い。人の過去はともに生き、ともに喜びや悲しみを味わった人たちだけによって共有されるべきもの。世代が移り変わっていくとともに、人が生きた痕跡はすべて消え去っていく——ギャスケルがその作品に描いているのは、そんなはかない人生が放つ優しく穏やかな光のように思えてくる。ミス・マティーがはるか過去にルーツを求め見知らぬ祖先に思いをはせる現代イギリスの人々を見たとしたら、どう思うだろうか？ ロンドンの地下鉄に乗りながら、ふとそんな思いが頭をよぎった。

『ギャスケル全集別巻I, II 短編・ノンフィクション』の編集を終えて

編集委員長 多比羅 眞理子

日本ギャスケル協会創立二十周年記念企画の一環としての『ギャスケル全集別巻I, II 短編・ノンフィクション』は、平成20年9月に第一巻が、続いてこの3月には第二巻が出版される。先の『ギャスケル全集』に未収録の30の短編、16編のノンフィクションがここに翻訳され、企画から実行に移されてからほぼ3年という短期間に終了し、出版されることは本協会会員の力強い団結力を世に示すことができた、大変誇らしい気持ちで一杯である。

ここでは、本企画がこれほど早く実現できたのか振り返ってみたい。第一巻あとがきで鈴江瑋子会長が述べられたように、本企画が持ち上がったのは平成18年、ギャスケル協会大会控室で大阪教育図書株式会社社長横山氏と雑談の最中だった。先の協会創立10周年記念企画だった『ギャスケル全集』の出版に私は事務局として参加していた関係で（このときも費用は会社が全面負担し、協会は販売協力するという形だった）、横山氏に全集の売れ行きを尋ねた。「まあ、ぼちぼちですね」との返事に胸をなでおろした時、「ギャスケルの短編はこれだけではないですよ、どうでしょう、協会で残りの短編を翻訳して出版してみませんか」という思いがけない申し出があった。翌19年1月12日事業計画委員長として一人新大阪に向かった。改札口には社長、そして、前全集の途中からの編集を担当した春名英明氏が待っておられ、挨拶もそこそこに、本企画の具体化に向けた話し合いがされた。①先の全集の別巻の形態をとり、同じような装丁にし、二巻で出版したい ②訳者には若手の研究者を積極的に加えてほしい ③作品が多岐にわたっ

ており、訳者が多くなるだろうから「用語の統一」は必ず編集委員の責任のもとに行ってほしい ④第一巻の発行を20年9月とするのであれば、第二巻はその半年後を予定し、その期日はできるだけ守ってほしい ⑤今回も費用負担は会社側が持ち、300部の販売協力を協会が行ってほしい、という要望が会社から出された。東京に戻り、会長に報告するとともに、この年は役員会が早い段階で開催されたのが嬉しい役員会ですぐに検討することができた。そしてこの企画をぜひ推進しようということで、早速編集委員が選出され、続いて編集委員会が開かれ、訳者の決定などが敏速に行動に移せたことが早期完成の大きな要因だったと思う。

次の要因は今回底本とした *The Works of Elizabeth Gaskell* を発行した Pickering & Chatto 社がその使用を快諾してくれたことである。その労を取られたのが、ユーリカ・プレスの小森高朗氏と日本シノプスの金子貴彦氏である。十年近く前、Pickering & Chatto 社が全集を企画し、日本での全集購入層をリサーチに来られた。その折、前会長の山脇百合子先生と事務局長の私とで日本のギaskell協会の活動やその将来性、また日本の読者の存在などを丸善書店のティールームで熱く語ったとき同席していたのが当時丸善社員の小森氏だった。伝え聞くところでは、来日した担当者は現在のピカリング社の社長だそうだ。そして平成17年、全集の出版開始の報告が金子氏からあり、その年の早稲田大学でのギaskell協会大会受付でこの全集を陳列紹介した経緯があった。今回底本としてはギaskellの短編・書評・日記などのノンフィクションがほとんど収録されている Pickering & Chatto 社の全集以外考えられなかった。そのため、早速両氏に全集の使用許可、著作権、使用料などについて会社と連絡を取りたい旨伝え、小森氏はすぐに連絡を取り、ありがたいことに使用料なしでの全集利用の許可をいただいた。先に面識があったことが今回プラスの方向に作用したのかどうかは不明だが、このように即座にしかも好意的に対応してくれたことは大変幸運なことだった。

こうして、『ギaskell全集別巻Ⅰ、Ⅱ 短編・ノンフィクション』の翻訳が始まった。その経過では、当然のことながら、予想もしないさまざまな問題が起こったが問題が起こるたびに編集委員会議を開催したり、電話、メールやファックスで意見を交換したりと、できるだけ最良の解決をはかった。

今振り返ってみると、大阪教育図書株式会社をはじめとして、Pickering & Chatto 社、短編集の翻訳に快く参加し、さまざまな制約の中での翻訳の作業を敢行してくれた会員、そして、本企画の当初から編集委員会に何度も足を運び、査読や校正作業など、労をいとわず協力いただいた編集委員の先生方と、この企画にかかわりあったすべての方々のご厚意と寛容な心に支えられて、この翻訳という難事業をやり遂げられたのである。まさにギaskellの作品の根底となる「人々の善意」と「思いやり」の気持ちがこの企画を支え、成功に導かれたと痛感している。



事務局報告（平成20年度）

【平成20年度第1回役員会】日時：5月31日（土）午前11時～午後1時30分、会場：実践女子学園 渋谷キャンパス内3号館中会議室、入会（以下敬称略）：榎正行、中井真理子、松本靖彦、齋藤九一、植田幸江、蛭町篤子、大野久美、奥脇栄子、松浦愛子、退会：久代佐智子、『論集』投稿論文審査報告（井出）、『論集』第18号〔創立20周年記念号〕の件（松岡）、『論集』印刷業者の変更の件（諸坂）、例会：同日午後2時30分より、於：実践女子学園 渋谷キャンパス3号館5階大会議室、総合司会：松村豊子、開会の辞：会長・鈴江璋子、シンポジウム「ギaskell文学とスピンスターたち」大嶋浩、田中孝信、閑田朋子、閉会の辞：副会長・東郷秀光、第20回大会の件、平成21年度行事予定：第21回例会：平成21年6月13日（土）に変更、会場：日本大学法学部、『別巻Ⅰ、Ⅱ』合評会を開催する。第21回大会：平成21年10月4日（日）、協会創立20周年記念大会とし、その後祝賀会を行う。会場：日本大学、大会運営委員長：諸坂成利、事業計画：創立20周年記念事業、『ギaskell展』を検討する。『ギaskell全集別巻Ⅰ、Ⅱ 短編・ノンフィクション』の件、ギaskell生誕200周年記念論文集について（大野）、会則検討・倫理規定作成の件（直野）、事務局報告：広報（市川）、会計（諸坂）平成19年度会計報告書、収支一覧、会費

納入状況、科目別支出細目の説明がなされ、平成20年度一般会計予算案とともに承認された。寄付の件：会長・鈴江璋子氏より寄付が協会に対してなされ、総会において贈呈式を実施することとなった。次回役員会は9月27日(土)神戸大学にて開催。

【平成20年度第2回役員会】日時：9月27日(土)午後1時より、会場：神戸大学鶴甲第一キャンパスN401、入会の件(平成20年5月31日以降)入会：前原由紀、村山晴穂、退会：宮田裕三(逝去)、『ギヤスケル論集』第18号〔設立20周年記念号〕及び第19号の件、第20回大会：9月28日(日)、会場：神戸大学国際文化学部E棟4F会議室、総合司会：矢次綾、開会：10:00、開会の辞：会長・鈴江璋子、研究発表：10:15～11:45、①西垣佐理「『ルース』にみる看護と感化力：『荒涼館』との比較をつうじて」司会：田村真奈美、②梅正行「ギヤスケルにふれて——カノンへのもどりかた、カノンの先の先への進みかた——」司会：廣野由美子、総会：11:45～12:30、司会：事務局長・諸坂成利、シンポジウム：13:30～15:45、「伝記文学とギヤスケル」司会・講師：宮丸裕二、講師：市川千恵子、光沢隆、講演：16:00～17:30、大野龍浩「写真で綴るギヤスケルの生涯」司会：松岡光治、閉会の辞：大会運営委員長・石塚裕子、閉会：17:30、懇親会：18:00、国際文化学部生協食堂にて(会費3000円)、記念事業の件、『ギヤスケル全集別巻I、II 短編・ノンフィクション』出版の件、次回大会の件、講演を海老根宏氏(内定)に依頼する。シンポジウムのコーディネーターには鈴木美津子氏。役員人事：平成21年度第1回役員会において会長・第12期幹事の改選を行う。第2回役員会において新役員を決定し総会に報告する。次回役員会は平成21年6月13日(土)午前11時より日本大学法学部において開催予定。

【総会報告】会計報告及び予算案につき承認された。また記念事業計画、祝賀会、『ギヤスケル全集別巻I、II 短編・ノンフィクション』出版の件についての報告がなされた。また鈴江会長から壹百万円の寄付の贈呈式が行われ、会場は拍手にまつまれた。

平成19年度日本ギヤスケル協会会計報告

PDF版につき省略致しました。

日本ギaskell協会 平成 21 年度例会のご案内

日時：6月13日（土）午後2時30分より

会場：日本大学 法学部

プログラム：

ワークショップ「『ギaskell全集別巻Ⅰ、Ⅱ 短編・ノンフィクション』合評会」

コーディネーター：松岡光治

第一部「フィクション」（司会 松岡光治）

テーマ：「愛」、「歴史」、「地方色」、「ゴシックとミステリー」、「ユーモアとペーソス」

第二部「ノンフィクション」（司会 鈴江瑋子）

テーマ：「個人的な記録」、「記録と考察」、「書評」

会員の皆様には会場、プログラムなどの詳細を追って郵送いたします。会員外の方もお誘いあわせの上、是非ご参加ください。

*平成21年度大会は10月4日（日）、日本大学法学部にて開催される予定です。シンポジウムは東北大学教授 鈴木美津子氏がコーディネーターとなり、ギaskellと英国小説の伝統という大きなテーマに基づき、準備を進めております。また、講演には東京大学名誉教授 海老根宏氏をお招きする予定です。

●●●●●●●●●● 編集後記 ●●●●●●●●●●

・2009年号は巻頭に *The Works of Elizabeth Gaskell* (Pickering & Chatto) の編集責任者を務められたレスター大学人文学部学部長・ヴィクトリア朝文化研究所所長の Joanne Shattock 教授によるエッセイを掲載いたしました。

・新たな試みとして、会員の方々の多彩な活動をご紹介するエッセイのコーナーを設けました。今回は、ロンドンで在外研究中の玉井史江氏と、『ギaskell全集別巻Ⅰ、Ⅱ 短編・ノンフィクション』の編集委員長の多比羅真理子氏から玉稿をお寄せいただきました。

・2007年号から編集を担当させていただき、この2009年号が最後の担当となりますが、その間に英国ギaskell協会の Joan Leach 氏、ギaskell作品のフェミニズム研究の第一人者である Patsy Stoneman 博士、ヴィクトリア朝文化研究では日本でも著名な Joanne Shattock 教授の玉稿を掲載することができましたことを嬉しく思っております。また、ご多忙にもかかわらず、寄稿していただいた会員の方々には、改めて心より感謝を申し上げます。鈴江会長の暖かなご助言、会員の方々の心強いご協力がなければ、無事に発行の運びとはならなかったことでしょう。なお、大野龍浩氏には毎回写真を提供していただきました。3年間編集を勤められましたのも、皆様のご支援の賜物です。編集の経験を通じて、私自身も多くのことを学ぶことができました。衷心より御礼を申し上げます。

(編集 市川 千恵子)

発行：日本ギaskell協会

〒101-8375

東京都千代田区三崎町2-3-1

日本大学法学部 諸坂成利研究室内

日本ギaskell協会事務局

03-5275-8730

URL: <http://wwwsoc.nii.ac.jp/gaskell/>

email: E-Mail : smorosak@law.nihon-u.ac.jp

発行日：2009年5月1日